

III 部（奄美小学校の歴史）

ここでは、わたしたちの奄美小学校の歴史を振り返ってみましょう。奄美小学校は今年で創立86年目になります。

どんなことがあったのか、どんな学校だったのか時の流れでみてみます。なお、〇〇年は「〇〇年度」を表します。例えば、平成20年1月のことであっても、平成19年度であり、平成19年として記述してあります。

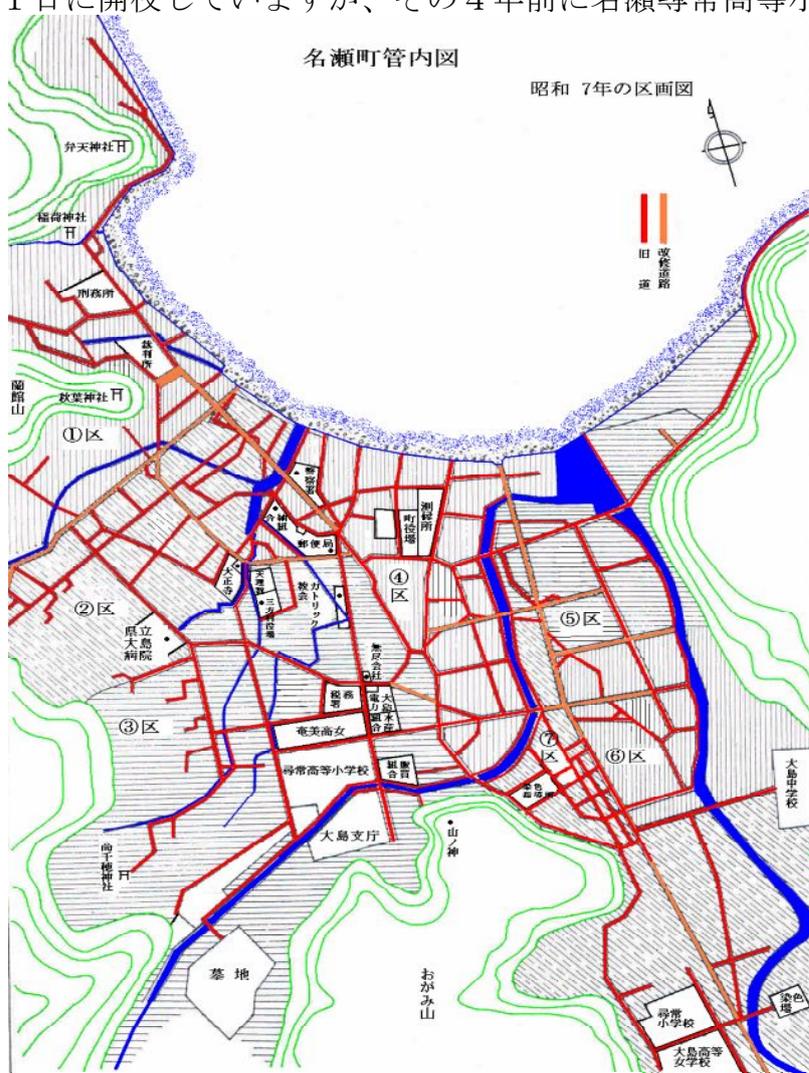


奄美小学校は、町が大きくなったり名瀬尋常高等小学校（今の名瀬小学校）の人数が多くなったりということで、名瀬小学校から分かれる形で学校が始まりました。

大正14年（1925）4月1日に開校していますが、その4年前に名瀬尋常高等小学校は、名瀬女子尋常高等小学校を分立させています。男女別にしたのです。その名瀬女子尋常高等小学校を廃止して、代わりに久里に作ったのです。当時の校名等です。

校名 名瀬尋常小学校
 所在地 大島郡名瀬町金久
 配田 1499番地
 通学区域 5区、6区、7区
 児童数 男子579名、女子471名、計1050名

所在地の「金久」は^{おおあざ}大字名、「配田」は^{あざ}字名です。通学区域については、当時は1～7区（1～4区は名瀬小校区）に分けていました。その後、昭和7～10年にかけて新川の大規模な河川工事（古田町のカトリック教会や奄美高校の近くを流れていたのを現在の流れに変えた）があり、8区もできました。おおまかには、5、6区が今の伊津部小校区、7区が学校周辺、8



（岩多雅朗氏提供資料）

区が古田・真名津町あたりです。

当時、今の小学校と中学校は、初等科（6年）と高等科（2年）と呼ばれていました。今の名瀬小学校には高等科も一緒にあったので名瀬尋常高等小学校、奄美小学校は初等科だけだったので名瀬尋常小学校という校名になりました。校名が似ているので、一般的には、今の名瀬小は「旧校」、今の奄美小は「新校」と呼ばれていました。校訓「強く 正しく 最後まで」も“新校魂”といわれました。

永田川を境に校区が分かれてきましたが、「旧校」と「新校」のライバル意識はものすごく、勉強や運動でも負けないようにと一生懸命だったそうです。また、永田川を挟んでのケンカも多かったようで、それぞれキューピー（旧校）に対しシンコダンゴ（新校）と呼び合いました。



児童数も開校した年から1000名を超えていますが、学級数は16、1学級あたりの児童数は66名となります。すごい数ですね。この頃は、男子と女子はクラスが別々なのも今と違うところです。また、落第児童74名（学力不良45、欠席29）という記録もあります。なかなか厳しかったのです。

このようにして始まった奄美小学校ですが、開校する2年前から土地の埋立工事をしたり、校舎の新築工事をしたりしています。開校する一ヶ月前に、木造2階建9教室1棟、木造2階建10教室1棟、木造2階建8教室1棟の3棟が完成しています。木造2階建校舎は、大島郡内では初めてだったので、見物にくる人も多かったそうです。また、学校は始まって施設は完全ではなかったもので、例えば、放課後の奉仕作業として、ウドン浜から砂を、新川原から石を全校児童が素足で運んだそうです。

昭和 元年（1926） 遠泳大会（御殿浜～山羊島）

（遠足も2回していますが、「落伍者ナシ」の記録があります。文字通り遠くまで歩いたのです。）

3年（1928） 児童数1157名、学級は「い組」「ろ組」と「いろはに」です。10月に町立学校連合運動会。11月に修学旅行。

（児童数は、その後も順調に増えます。修学旅行は、龍郷に1泊、赤木名に1泊の2泊3日。赤木名まで10時間余りかけて歩いたそうです。）



5年（1930） 増築校舎完成。

〔昭和5年授業風景〕

昭和 6年(1931) この年から「落第」という言葉が「停級」に変わります。
(「停級」は、昭和30年代まで残ります。)

8年(1933) 校門前道路の完成。
(幅3間半といいますから、約6.3mです。)



[昭和8年全校朝会]

名瀬の町にも2階建ては少なく、2階教室からは名瀬港や立神もよく見えたそうです。掃除時間になると、窓ふきをしながら、町を見下ろしたり港に出入りする船を見るのが楽しみだったそうです。

昭和 9年(1934) 児童数1576名。

10年(1935) 記念図書館落成(創立10周年)

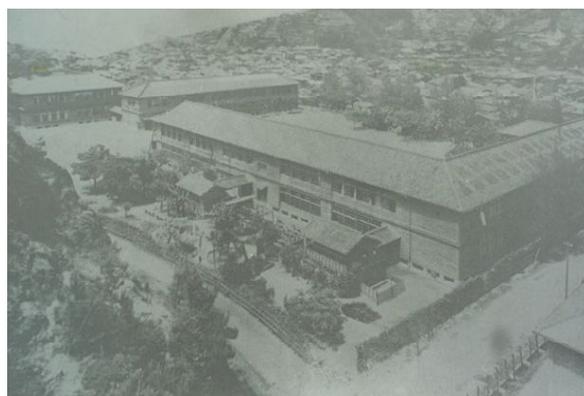
12年(1937) 2階建木造4教室1棟増築。敷地986坪拡張。

(6月に防空演習をしています。戦争が身近になっていたのですね。)

13年(1938) 学級が「1組」「2組」と「1234」です。

ラジオ・蓄音機・
拡声器3兼用器購入。

14年(1939) 児童数1389名。職員数28(欠員1、応召1)



[昭和13年校舎全景]

(応召1とは、先生が1人軍隊に入ったことをいいます。)

16年(1941) 大島郡名瀬町奄美国民学校となる。

(前年度までの名瀬尋常小学校としての卒業生は3092名です。)

昭和16年に太平洋戦争が始まります。全国の尋常小学校は国民学校と名前が変わります。奄美小学校でいえば、この時初めて「奄美」という名前がつきます。校名に「奄美」をつけたのは校長玉利源熊氏の発案(『笠利町誌』)です。高等科も置かれるようになり、初等科と高等科の合計で1682名です。それまでは初等科しかありませんでしたので、高等科に行く時は今の名瀬小に行っていたのです。

なお、この年の身長・体重の記録があります。()内は今年です。

1年 男子 107.6cm16.9kg (115.2cm21.1kg) 女子 104.6cm17.3kg (113.6cm20.2kg)

6年 男子 129.5cm26.4kg (144.0cm38.0kg) 女子 131.3cm27.6kg (146.3cm39.0kg)

6年生で、男女とも身長が約15cm、体重が約10kg違いますね。ちなみに、当時

の6年生の体格は今の子どもでいうと、3年生と4年生の間になります。

昭和17年（1942） 児童数1766名。

翌年の昭和18年から昭和22年までは、戦争が激しくなったり戦後の混乱期だったりということで、これまでのような保存記録がありません。

右写真の池は、西側校舎の裏にありました。



〔昭和18年 大島地図池にて〕

昭和20年4月20日には、大規模な空襲のため、校舎が全焼しています。海からの風が強い日で、町からの火が奄美小、そして今の奄美高校へと延焼していきました。

戦争中は、今の給食室の裏に防空壕も掘っていました。危険な時は逃げたり貴重品を移したりしました。

昭和21年2月2日には、奄美大島行政分離宣言が出され、昭和28年12月25日に日本に復帰するまで、沖縄県とともにアメリカ合衆国の統治下におかれます。そうした中で、昭和23年に新しく奄美小学校としてスタートするのです。

但し、その間学校がなかったわけではありません。昭和22年までは奄美国民学校です。奄美国民学校としての卒業生は1471名です。昭和20年度は残っていませんが、他の年は卒業台帳が残っています。その結果、昭和20年度の卒業生も185名だったことがわかります。

この頃は、まともに校舎もなかったので、近くの民家の空き家を利用したり、配田が丘の林の中で授業をしたりしたこともあったそうです。

奄美国民学校が名瀬市奄美小学校に変わったのは、昭和22年になって、日本の教育制度が大きく変わったためです。今の小学校6年・中学校3年・高等学校3年という、いわゆる6・3・3制になるのです。奄美は、アメリカ合衆国の統治下のため、6・3・3制も本土より1年遅れてしまいました。

6・3・3制になったといっても、奄美はアメリカ合衆国の統治下ですので、詳しいことはわかりませんでした。6・3・3制もわからない、教科書もないということで、2人の先生が鹿児島や東京などに行って、情報や教科書等を仕入れてくることになりました。2人の先生は、奄美小学校の森田忠光先生と名瀬中学校の深佐源三先生でした。2人だけの計画ではなく、奄美の教育のため子どもたちのためということで、たくさんの人々の協力があり、代表として行ったのです。

当時の奄美はいわば外国と一緒にですので、簡単に鹿児島に行くというわけにはいきません。2人は、金十丸（600トン）という船のコック見習いとして密航していきます。失敗したら困る、関係者に迷惑をかけるということで、辞表まで提出しています。

昭和23年6月28日に名瀬を出発します。その後、大変な苦労をしながら、広島・東京・鹿児島・神戸・鹿児島・沖縄と行き、同年10月6日に名瀬に戻っています。

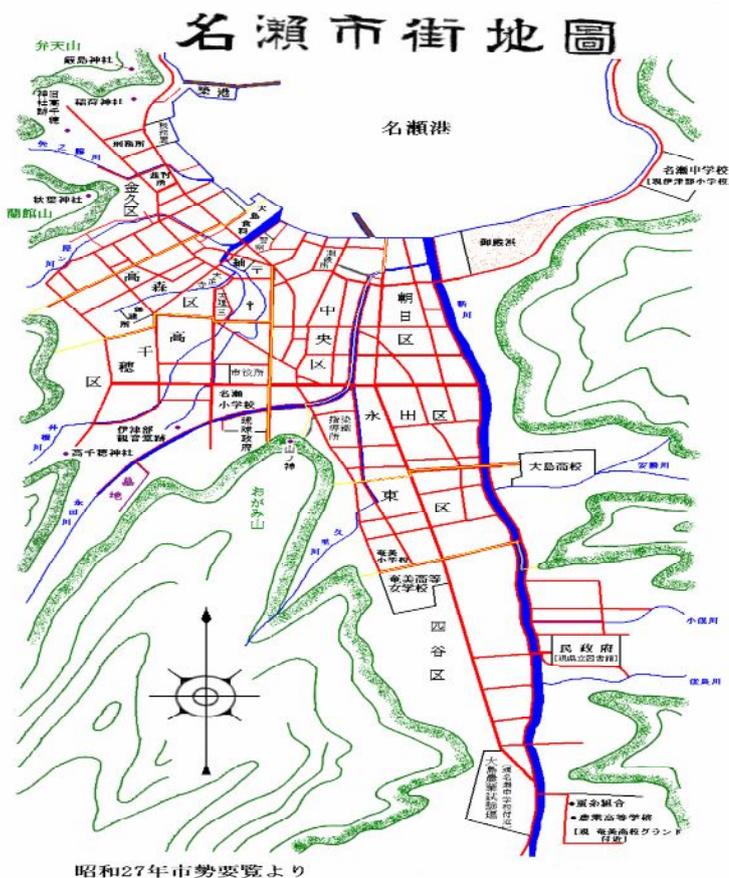
6・3・3制の資料やPTA規約、教科書等をもたらり附属小学校を見学したりしています。持ち帰った教科書を印刷して、各学校に配り、授業に生かしました。

昭和23年（1948） 名瀬市奄美小学校と改称する。
児童数1402名。
所在地は名瀬市久里町大字金久字配田1499番地。
市設付属幼稚園設置。

名瀬尋常小学校と奄美国民学校時代を踏まえて、この年の卒業証書番号は、4564号から始まっています。この頃は、終戦から間もなかったもので、掘っ立ての校舎とテントの下で雨水をさけながらの授業でした。学校の椅子は、丸太を切ってきてつかい棒にのせたもので、机は七分板を横に並べただけのものでした。

なお、区別の児童数は、朝日区（217）永田橋区（274）東区（382）四谷区（454）校区外（75）です。

朝日区はすべて今の伊津部小校区。永田橋区は新開町・北安勝町・新栄町・芳町、東区は久里町・石橋町・南安勝町、四谷区は緑町・住吉町・小俣町・生産町・古田町のことで、（Ⅱ部74ページ参照）



昭和27年市勢要覧より

(岩多雅朗氏提供資料)

昭和24年（1949） 学校PTA結成。（7月）



〔この頃の名瀬中の校舎〕

PTAは、戦後作られた組織です。これまでは学校の金銭的援助をする程度であった後援会が、先生と一緒に児童生徒の教育に努力するようになったのです。前述の森田先生らが持ち帰った資料の中にPTA規約もありましたね。奄美小のPTA結成がきっかけとなって、翌年4月に各小中高校にPTAが発足しました。

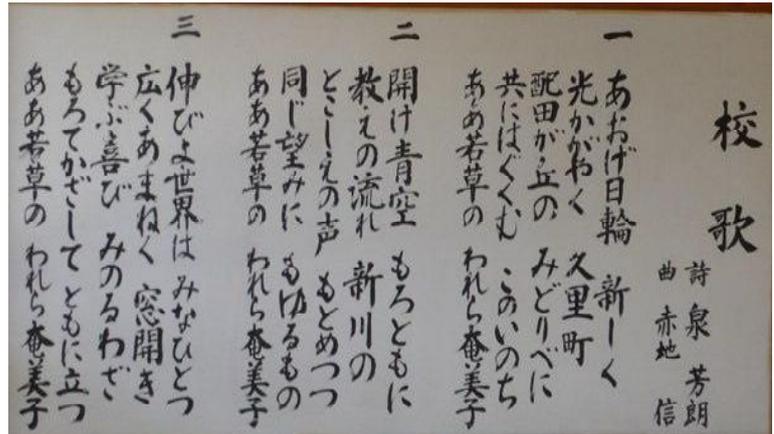
この頃の学校の様子は、校舎の窓にはガラスな

どなく、雨戸があるだけ。電灯もついていませんでした。瀬戸内町にあった旧海軍の建物を払い下げてもらい、職員の共同作業で引っ張ってきて建てたという、中廊下の教室もありました。

給食はなく、子どもたちは家に帰ってお昼ご飯を食べていましたが、貧しさのため食べられない子どもたちもいました。普段はみんな裸足でした。

また、この年の4月に校歌が制定されています。作詞者は、後に名瀬市長になり、復帰運動の中心となった泉芳朗氏、作曲者は、後に知名町長にもなった赤地信氏です。

泉芳朗氏は、徳之島の伊仙町出身。詩人で小学校長なども務めました。『泉芳朗詩集』の年譜には、昭和11年に母校の面縄小の校歌や昭和30年に名瀬中の校歌を作詞した、との記録がありますが、奄美小の記録はありません。奄美小から作詞を依頼されたのでしょう（当時の奄美小校長は7代高元武氏。昭和21年の頃、泉氏と高元氏は大島支庁教育課の同僚です。また、昭和28年6月の復帰嘆願書には、11名が署名していますが、最初に復帰協議会長として泉氏、2番目に連合教職員組合長として高元氏が署名しています）。昭和34年に54歳で亡くなっています。その功績から郡民葬で葬られています。（I部「復帰運動」参照）



終戦後まもない頃で、まだまだ食糧事情や住宅事情も厳しい時代でした。「あおげ日輪」（日輪とは太陽のこと）や「ああ若草のわれら奄美子」など、これからの奄美のために頑張ってもらいたい、という泉氏の強いメッセージが感じられる素晴らしい歌詞です。

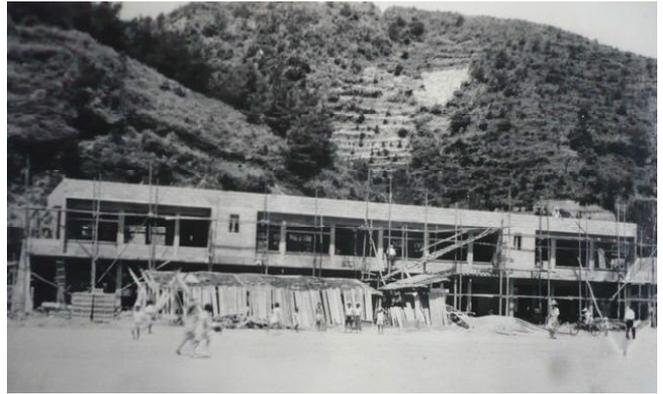
赤地信氏は、沖永良部島の知名町出身。大正11年に学校の先生となり、大正14年奄美小（当時の名瀬尋常小学校）が開校した時、奄美小の先生となりました。開校と同時に奄美小に赴任したのです。テニスとピアノが得意な先生だったそうです。その後、昭和18年には校長となり、この頃には沖永良部島の下平川中学校の初代校長でした。音楽に堪能で、かつて奄美小にも勤務したことがあるということで、奄美小から作曲を依頼されたのでしょう。昭和27年には沖永良部地区教育長となり、昭和36年には知名町長に就任しています。平成4年に、90歳で亡くなっています。

- 昭和26年（1951） 校門南側校舎竣工（木造50坪）
- 昭和28年（1953） 琉球政府予算により8教室ブロック建2階校舎落成
（192坪で9月11日落成）

琉球政府予算というのがすごいですね。この時は、まだアメリカ合衆国の統治下で沖縄に政治の中心がありました。復帰するのは約3ヶ月後です。この校舎は、アメリカの

オグデン副館長の尽力によって復帰のプレゼントとして建てられたもので、オグデン校舎と呼ばれました。モダンな校舎で、復帰後も校舎建築のモデルとされましたが、それまでの吹き抜けの校舎に比べ、夏は暑かったそうです。

右の写真は〔建築中のオグデン校舎〕です。



昭和29年（1954） 児童数1697名。ブロック校舎6教室落成。

30年（1955） 児童数1835名。ブロック校舎（182坪）落成。
（この頃の校舎は、床も板張りではなく、コンクリートがそのままでした。）

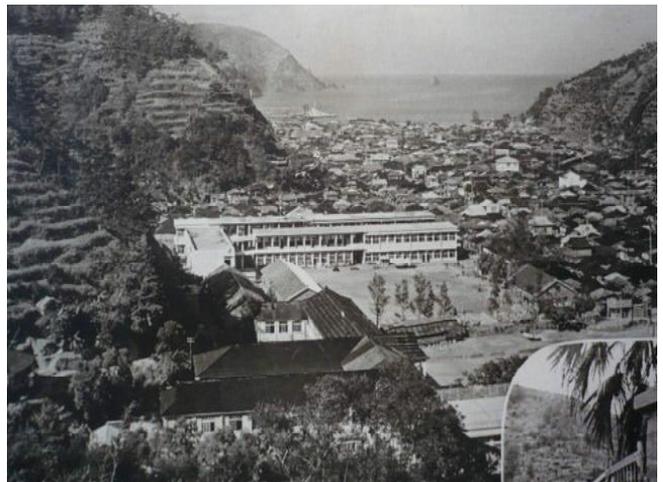
31年（1956） 児童数2072名（男子1075名、女子997名）。ブロック校舎落成。

（この年に児童数が2000名を超えます。）

32年（1957） 児童数2407名。
ブロック校舎落成。

33年（1958） 児童数2834名。
仮校舎150坪倒壊。

ブロック給食調理室150m²落成。完全給食開始（3月11日～）



〔昭和32年校舎全景〕

昭和28～32年までの5年間は毎年ブロック校舎落成、昭和33年はブロック給食調理室落成、となっています。児童数の増加にあわせ、すごい建築ラッシュです。校庭等には建築資材が積まれ、人の声や物音がやかましい雰囲気だったそうです。

昭和33年の2834名というのが児童数の最高です。それにしても、3年間で児童数が約1000名増えるというのは、驚異的というほかないです。今の感覚でいえば、毎年300名ぐらいの学校と一緒にあったようなものです。

現在よりも狭い敷地で、校舎等の施設も十分ではなかった時代に、現在の5倍近い児童数がいたなんて、ちょっと想像ができませんね。

日本に復帰して往来が自由となった結果、たくさんの方が島に帰って来たり、同じ奄美地区でも名瀬市に引っ越して来たりしたこと、また、日本全体がベビーブームだったことなどからこのような児童数の推移になったのでしょう。

右の写真は、この頃の校旗と校門です。

校章が今と全然違いますね。この時の校章は、「草戸」（以前は久里を草戸といていた。Ⅱ部75ページ参照）の「草」からきています。「草」を昔は「艸」とも書いたのです。「艸」をデザイン化したものです。



また、学校の電話番号は、「名瀬局155」です。まだまだ電話は少なかったのですね。ちなみに、この年の名瀬小学校の児童数は2822名です。

昭和34年（1959） 伊津部小学校新設のため校区変更。児童数2487名。
修学旅行（高千穂丸で古仁屋方面へ）

かつて、名瀬小（名瀬尋常高等小学校）から分かれて奄美小（名瀬尋常小学校）ができたように、児童数の増加に伴い、伊津部小学校が作られました。児童数は821名です。前の年の児童数で比べると、奄美小は-347、名瀬小は-56ですので、奄美小の児童が多かったことがわかります。

それでもまだ教室数は十分でなく、1教室を仕切って2学級を収容していました。

また、学校名も昭和33年までは「名瀬市奄美小学校」ですが、昭和34年から「名瀬市立奄美小学校」と「立」が付け加えられています。

なお、この年以降、奄美小の児童数も減少傾向になります。この年が児童数のピークと考えると3校で6074名。平成22年度は、3校で1349名。4分の1以下ということになります。

昭和35年（1960） 学校西側道路を廃道して学校敷地に編入。

（今の東門のところから奄美高校の方へ道路が通っていたのです。今の理科室があるところは、普通の民家が建っていました。

84ページの「昭和27年名瀬市街地図」を見ると、奄美小学校の敷地が今より狭いことがよくわかります。



【昭和36年全景】

なお、昭和36年3月31日に市内3小学校の校区再編成があり、伊津部小は718→1272と増加しますが、この時はほとんど名瀬小からの児童です。奄美小校区では、永田橋通りとその1つ手前の道路の間部分が、

伊津部小校区となっています。ここから、現在の奄美小校区と同じです。Ⅱ部75ページ参照。

昭和37年(1962) 児童数2362名。

ブロック3階建
9教室落成

(右写真のように、今の3階校舎が半分ほどできていますね。右下の校門も変わっています。)

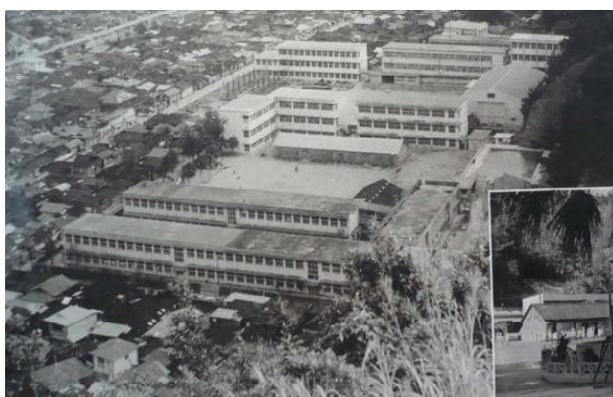
39年(1964) ブロック3階建
12教室 2階建2教室 宿直室落成

(今の3階校舎の残り半分です。右の昭和40年の写真からもわかるように、今のようにくっついていませんね。すき間がありますが、校庭が狭かったので、子どもたちのいい遊び場だったそうです。)

40年(1965) プール完成。脱衣室・シャワー室落成。



〔昭和37年全景〕



〔昭和40年全景〕



プール費用は、すべてPTAの寄付金により賄われました。プール費用は、当時のお金で480万円かかりましたが、500万円の寄付金を集めたそうです。創立40周年事業です。3階校舎の前にあるのは、幼稚園の園舎です。プールも見えますね。

昭和41年(1968) 児童数2345名。

(この年で卒業生が10000名を超えます。)

42年(1967) 体育館竣工。(200坪)
校旗制定。

(ここで、校章も変わり現在の校旗ができます。)

43年(1968) 県道沿いの新校舎落成(普通
教室7、理科室2)



この頃は児童数も多く、校庭も狭かったため、全校朝会で全校児童が並ぶことはできませんでした。1・2年生は教室で放送を聞き、3～6年生は、前後の2列に並んで行っていました。また、児童数の割にトイレの数も少なかったため、いつも順番待ちのよ

うになっていたそうです。

昭和44年（1969） 校地拡張工事
起工式。

児童数219
1名。

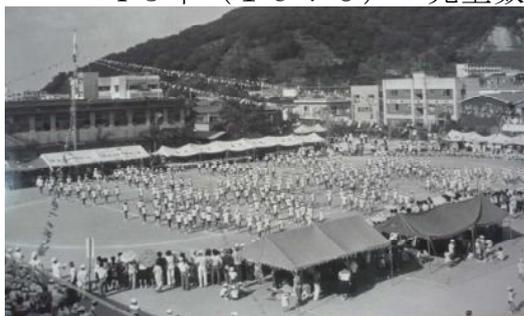
（今の「自然の森」付近を広げたり、
校内にあった幼稚園を移転したりし
て、校庭を広くしたのです。当時の
校庭の広さは4200m²、この追加分は
4310m²で合計8510m²。翌年11月、
工事は完了します。校地拡張については、本校の長年の悲願だったようで「よう
やく体育の時間に校庭で運動ができる」と大喜びだったそうです。自慢の鼓笛隊
を繰り出して、市中パレードもしました。但し、4200m²は文部省基準の12.9
%、広くなった8510m²でも26.1%にすぎませんでした。まだまだ狭かったの
です。）



〔昭和44年全景〕

45年（1970） 児童数2195名。修学旅行（徳之島へ2泊3日）

ミルク給食を混合乳給食に切り替える。
大運動会を12年ぶりに自校で実施。



【昭和50年運動会】

この年から修学旅行は徳之島へ行っ
ていますが、6年生全員が宿泊できるホテ
ルがなく、2～3の旅館に分かれて宿泊
しました。旅館には大きなお風呂がなく、
たくさんの児童を限られた時間の中で、
お風呂を済ませるために先生方は汗だ
くになったそうです。なお、翌年のこと
ですが、修学旅行参加の児童数377名、
引率教員16名となっています。引率教
員が16名というのもすごいです。



〔昭和46年全景〕

なお、この頃はテレビは2クラスに1台しかなく、テレビ放送を見る時は、ある方の
教室で2クラス一緒に見たそうです。教室に80～90人入ったのです。



この頃、児童の交通安全を考えて、帽子の色が今の「白」と「黄」に変わっています。「黄帽子」で登下校です。運動会も「白組」と「黄組」です。

昭和47年（1972） ガジュマルの木を植樹する。
（今はシンボルツリー“ストグレガジュマル”となっていますが、当時は住用村戸玉の崖からトラック3台で運んできたそうです。校庭のガジュマル4本は、1本の大木を四つ割にしたものです。）

48年（1973） スクールゾーン設置。

49年（1974） 校舎建築落成（視聴覚室、図工室、音楽室）
児童数1988名。学級数50。

創立50周年。

（すき間のあった3階校舎の間に3教室ができて、3階校舎は今のようになり1つになります。屋根の白い部分です。ガジュマルの木も今よりも細いですね。この年から児童数が1000名台となります。創立50周年の記念式典は、児童数が多かったためか、昭和50年3月に、左下の記念誌表紙のように校庭で行っています。また、バトンガールを先頭にして、校区内をパレードしています。）



〔ガジュマルの木〕



〔昭和51年全景〕



昭和50年（1975） 配田が丘整備・活用開始
（1学級減のため、2人の先生が定員オーバーとなり、途中で転勤しています。）

ここで、「配田が丘」についてまとめておきます。前述したように、昭和45年に校庭が広くなり、「ようやく体育の時間に校庭で運動ができる」ようになりましたが、それでも校庭が狭いことに変わりはありませんでした。そのため、子どもたちは全体的に体力不足で、例えば、全校朝会の時などは途中で気分が悪くなり、保健室が満室状態になるほどでした。

そこで、「配田が丘」を利用することにしたのです。

昭和47年(1972) 9月 配田が丘実地踏査境界確定
(使える土地の確認です)

48年(1973) 2月 配田が丘伐採作業

12月 配田が丘整備作業

49年(1974) 2月 配田が丘整備作業



記録に残っているだけでも3回の大きな作業をしていますが、これらはすべてPTAの奉仕作業です。午前上
学年、午後低学年といった具合です。すべて人力で、コン
クリートなどもバケツリレーで頂上まで運びました。

昭和50年度から実際の活用となりますが、その後も

51年(1976) 6月 特別作業(草なぎ、
体力作り施設作り)

11月 特別作業(体育施設作り)

52年(1977) 3月 特別作業「配田
が丘の体育施設完
成」



とPTA作業が続きます。

その他の作業として、手すり工事や網取り付け工
事、大すべり台設置などがありますが、必要に応じ
て奉仕作業が組まれています。

子どもの体力作りのために作られた「配田が丘」

は、標高71m、1周550mの登山コースでした。687回で鹿児島、6182回で
北海道に到達する計算になり、「卒業するまでに北海道に行こう」を合い言葉に頑張った
そうです。昭和52年12月10日に、5年生の久津
輪修一君が「北海道までの距離突破」の記録がありま
す。北海道まで行った第1号だったのでしょう。「配田
が丘」のことは、その後新聞やテレビ等で何回も取り
上げられています。



こうしてみると、PTA新聞の名前が「配田が丘」
であることや、学校の空き教
室を地域のために活用する施
設の名前が「配田が丘きょら館」であることが、よくわかる気
がします。

昭和51年(1976) プール湧水施設完工。

53年(1978) 蘇鉄植樹(正門前 右写真)

54年(1979) 中国引き揚げ児童のための日本語
学級「小鳩学級」開設

毎週2回の米飯給食開始





奄美小学校標準服制定
バイオリニスト久保陽子演奏会

給食は以前はすべてパン食でした。標準服制定は名瀬市内の学校では最後でした。久保陽子さんは、奄美小出身で世界的に有名なバイオリニスト。演奏会の後、「南にある音楽への豊かな才能を、私達は神様に感謝しなくては」と述べています。左の写真は、奄美小時代の久保陽子さんです。

昭和55年（1980） 第20回国民学校卒業証書授与

（第20回奄美国民学校卒業生は、昭和20年3月に卒業したのですが、戦争が激しく卒業式ができませんでした。35年後に卒業証書を授与されたのです。在校生6年生の送辞や、器楽部演奏による「仰げば尊し」の合唱もありました。）

昭和59年（1984） 3階校舎大改修
工事完了。

3階校舎東側、
西側のトイレ水洗
化。

創立60周年。

（3階校舎が全体的に白くきれいになっているのがわかりますね。）

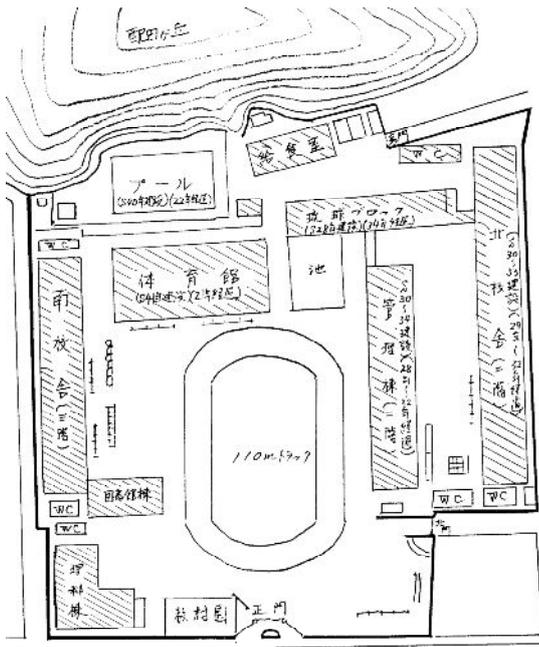
61年（1988） 給食室完成
（57坪）。

62年（1987） 児童数1500名。

修学旅行（この年から徳之島・沖永良部島へ）
「自然の森」完成。



〔創立60周年〕



徐々に減少していた児童数がちょうど1500名となります。

左の図は、昭和62年4月の校舎配置図です。現在と大きく違う点は、4階校舎のところに2階校舎が2棟建っています。そのため、校庭が今よりも狭くトラックの1周が110m、トラックの方向も今を横長とすると、縦長になっていますね。体育館の横にある池は、今の体育館前の池とは違います。今は校長室前に築山がありますが、この頃は池だったのです。

よく見ると、他にも違うところがあります。どんなところに気付きますか。

昭和63年（1988） 新校舎第1期工事完工（945坪）新校舎完成（485坪）
（この年にLL牛乳をUHT牛乳に切り替えています。）

平成 元年（1989） 新校舎建築
落成式

（今の4階校舎の完成です。4階校舎は奄美地区では初めての校舎で「まるで豪華船みたい」といわれたそうです。校舎2棟が1棟になったので、校庭が広くなり、今のよう1周150mのコースを横長にとれるようになりました。）

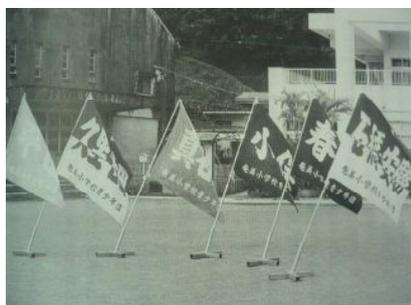


〔4階校舎の落成式〕

平成 2年（1990） 異年齢集団「わかくさ団」活動発足。

東門完成。

（「わかくさ団」の活動は、本校の特色ある教育活動の1つですが、約20年の歴史があるのですね。左の写真のように、町毎の大きな旗もありました。）



平成 3年（1991） 正門

古見本通り沿い花壇完成。

（この花壇については、右の写真のように、建設省から「手づくり郷土賞」を受賞しています。）

平成 4年（1992） 「自然の森」整備
修学旅行（この年から鹿児島・霧島方面へ）。



（10月に島口大会が開かれています。昔は「方言を使うな」だったわけですが、この頃から島の文化や奄美らしさを大事にしようとしたのです。今では、大島地区全体で2月18日を「方言の日」と定めています。）

平成 5年（1993） 「庭園」完成。
（11月に「奄美の宝」発表会が開かれています。島の文化を大切にします。）

6年（1994）
児童数1051名。
創立70周年。
飼育舎完成。



〔創立70周年〕



平成 7年（1995） 児童数975名。

テキサス州ナカドゥチェス市長 一行来校。

ハウオウボク植樹（左写真）

（減少していた児童数が、初めて1000名以下となります。この年に名瀬市はナカドゥチェス市と姉妹都市の盟約を結びました。ナカドゥチェス市は、人口約3万人でテキサス州の古都と呼ばれています。人口の半数近くは大学生の学園都市です。）

平成 8年（1996） トックリキワタ植樹（右写真）

9年（1997） 体育館渡り廊下屋根完成。

ナカドゥチェス市中学生との交流学習

10年（1998） 英会話学習開始（レッツ・ビギン英語に親しむ研究指定校）
校旗寄贈。

（まもなく全国的に小学校に外国語活動が始まりますが、10年も前から英会話学習を始めていたわけですね。平成21～22年度も「外国語活動」の研究指定校です。）

11年（1999） 給食室前渡り廊下完成。

13年（2001） 奄美小付属幼稚園を奄美小学校内へ移転。

「奄美小学童クラブ」スタート。

体育館改修工事完了。



昭和44年に児童数が多かったり校庭が狭かったりということで、奄美小付属幼稚園は別の場所に移っていましたが、3階校舎1階に戻ってきます。また、空き教室の活用ということで、「奄美小学童クラブ」もスタートします。昭和50年ぐらいまでは、教室が足りない、校庭が狭いといっていたのに、随分と変わってきたのですね。

平成15年（2003） 児童数687名。ネリヤカナヤコンサート

（減少していた児童数が、600名台となります。ネリヤカナヤは、“海のかなたの理想郷” という意味があります。）

16年（2004） 創立80周年。

（創立80周年を迎えたこの年に、卒業生が20000人を超えました。すごい数ですが、単純計算しても1年間に250名の卒業生を送り出し続けてきたこととなります。平成21年度までの卒業生は、全部で20572名です。）

17年（2005） 名瀬市・笠利町・住用村が合併し、奄美市誕生。「奄美市立奄美小学校」へと名称変更。

（わたしたちの学校は、名瀬尋常小学校 → 奄美国民学校 → 名瀬市立奄美小学校 → 奄美市立奄美小学校と変わってきたのです。）

平成20年(2008)
児童数642名
(男子303名、女子339名)
21年(2009)
児童数627名
(男子294名、女子333名)
新プール完成。



[平成21年全景]

現在のおがみ山からの奄美小学校全景です。後ろの奄美高校の校舎が随分と変わり、県立奄美図書館ができていますね。



これまでのプールは昭和40年にPTAの寄付で造られたすばらしいプールでしたが、古くなったため、新しいプールができました。新しいプールは擁壁もあり、更衣室も2階立てです。大プールがこれまでの7コースから5コースとなったため、低学年用の小プールも設置してあります。

また、前年まで奄美小は大島地区で1番の大規模校でしたが、朝日小学校の児童数が633名となったため、2番目となりました。

22年(2010) 児童数592名(男子287名、女子305名)
学級数21。P戸数452。

(児童数が初めて600名を割りました。なお、町別の児童数は、安勝：68、石橋：42、久里：51、古田：42、小俣：104、春日：101、真名津：93、平田：91となっています。)

また、本年度は昭和37～43年にかけて造られた奄美高校側の3階校舎の大規模改修工事が予定されています。)

これまで、奄美小学校の歴史を主に児童数の推移や施設関係等を中心に述べてきましたが、関係する皆さんの努力で、多方面に亘る受賞の多さ・活動の素晴らしさがあります。

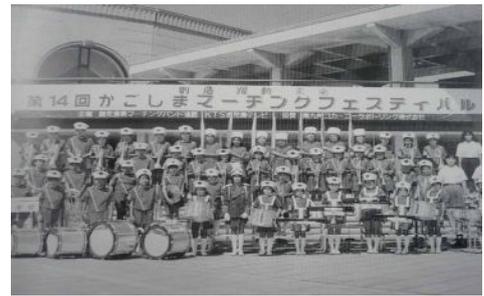
いくつかあげても、次のようになります。

児童関係では、理科記録展学校賞、MBC器楽コンクール最優秀賞・知事賞、NHK全国音楽コンクール



出場、南日本硬筆展学校賞、ベストバンド賞（ビューグル・バンド）、図画作品展学校賞、県作文コンクール地区審査会学校賞 等

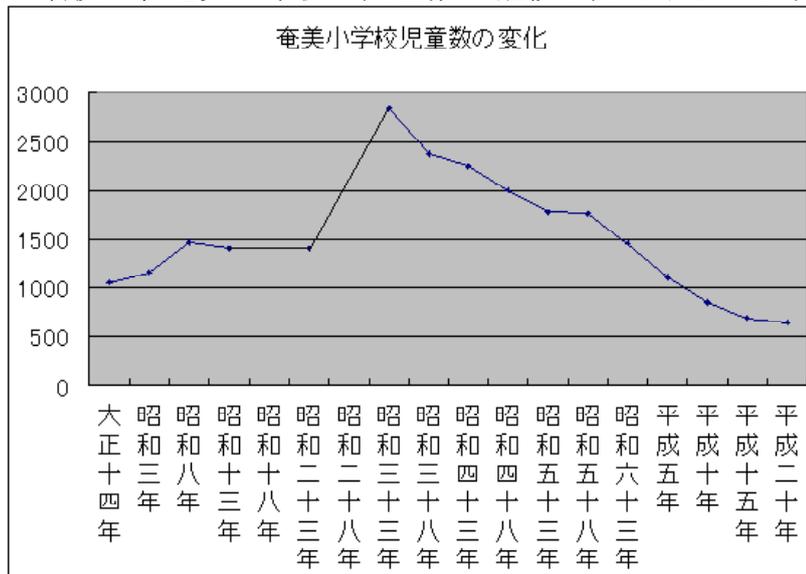
P T A関係では、P T A新聞「配田が丘」最優秀賞、市P T A連合会フォーラムにて読み聞かせ会発表、市P T A連絡協議会発表会にて発表 等 （旧プールや東門等、P T A関係の施設が多いのも本校の特徴です。）



〔ビューグルバンド〕

学校全体では、学校給食優良校、県指定給食研究協力校、県交通安全教育協力校、教育統計優良校（全国表彰）、才能開発実践教育賞、文部省委嘱読書指導研究指定校、全九州教育学校図書館コンクール優秀賞、読書活動文部科学大臣表彰 等

最後に、奄美小学校の児童数の推移を見てみましょう。



随分と減少した感じですが、少子化がすすむ現在にあっては全国的な傾向です。児童数が2000名を超えていた頃は、県内でも1、2を争う大規模校でした。現在は、600名弱ですが、大島地区では2番目の大規模校です。児童数は横ばい状態もしくは若干の減少傾向が予想されます。

なお、昭和18年と昭和28年は児童数の記録がありません。

校長室の窓からは、3つの言葉が見えます。（体育館玄関横）

「負けるな うそを言うな 弱い者をいじめるな」

「奄美っ子よ でっかい夢をもて」

「20年後の「きみ」は、どこで何をしている」

最初の言葉は、薩摩藩が郷中教育とよばれる青少年教育の中で、最も大事なこととして指導してきた言葉です。「負けるな」は、他人に負けるな、ということではなく、自分の弱い心に「負けるな」ということです。

わたしたちは、2万人を超える多くの先輩方が残してくれた伝統を大事に引き継ぎながら、一人一人の力を生かし、全員で協力し合って、すばらしい奄美小学校、この奄美地区にふさわしい学校をつくっていきたいですね。

奄美小の子どもとして、しっかり頑張っていきたいですね。

〔主な引用・参考文献〕（50音順）

- 『赤木名城』（奄美市教育委員会 2008年）
- 『奄美大島笠利町の民家調査報告』
（財団法人日本ナショナルトラスト 1996年）
- 『奄美学 その地平と彼方』（「奄美学」刊行委員会編 南方新社 2005年）
- 『奄美郷土研究会報』（奄美郷土研究会）
- 『奄美群島日本復帰五十年の回想』（楠田豊春著 平成15年）
- 『奄美・小宿集落誌』（大津幸夫著 平成22年）
- 『奄美市文化財調査報告書第1集 奄美大島奄美市小湊フワガネク遺跡群Ⅱ』
（奄美市教育委員会 2007年）
- 『奄美市文化財調査報告書第2集 辺留城（グスク）発掘調査報告』
（奄美市教育委員会 2008年）
- 『奄美市文化財調査報告書第4集 奄美市笠利町グスク詳細分布調査報告書』
（奄美市教育委員会 2009年）
- 『奄美の風土と人と心』（水間忠光著 平成12年）
- 『奄美の歴史さまざま』（山下文武著 奄美文化財団 1994年）
- 『アメリカ占領下の苦難の奄美 うらみの北緯三十度線』（深佐源三著）
- 『泉芳朗詩集』（泉芳朗詩集刊行会 昭和34年）
- 『海原の平家伝承』（高橋一郎著 三弥井書店 平成10年）
- 『沖縄県史 各論編 第四巻 近世』（沖縄県教育委員会 2005年）
- 『沖縄県史 各論編3 古琉球』（沖縄県教育委員会 2010年）
- 『沖縄県の歴史』（安里進他著 山川出版社 2004年）
- 『概説 沖縄の歴史と文化』（沖縄県教育委員会 2000年）
- 『改訂新版 奄美の歴史と年表』（穂積重信編著 平成12年）
- 『改訂 名瀬市誌』（1～3巻）（名瀬市 平成8年）
- 『鹿児島県の歴史』（原口虎雄著 山川出版社 昭和48年）
- 『鹿児島県の歴史』（原口泉他著 山川出版社 1999年）
- 『鹿児島島の湊と薩南諸島』（松下志朗・下野敏見編 吉川弘文館 2002年）
- 『喜界町誌』（喜界町 平成12年）
- 『近世奄美の支配と社会』（松下志朗著 第一書房 1983年）
- 〔現代のエスプリ〕別冊『奄美復帰50年ヤマトとナハのはざままで』
（編集松本泰丈・田畑千秋 至文堂 2004年）
- 『市勢要覧』（名瀬市役所）
- 『新奄美史』（上・下巻）（藤原南風著 昭和55年）
- 『新訂 奄美復帰史』（村山家國著 南海日日新聞社 2006年）
- 『瀬戸内町誌 歴史編』（瀬戸内町 2007年）
- 『戦後の奄美教育史』（名瀬市教育委員会 平成5年）
- 『名瀬市議会五十年史』（名瀬市議会五十年史編纂委員会 平成9年）
- 『名瀬大正外史』（池野幸吉著 昭和59年）

- 『日琉交易の黎明』（谷川健一編 森話社 2008年）
- 『林蘇喜男雑纂（Ⅰ）～（Ⅴ）』（林蘇喜男著 平成10～14年）
- 『故郷は博物館』（笠利町教育委員会 2003年）
- 『辺境からのまなざし 笹森儀助図録』（青森県立郷土館 平成17年）
- 『掘り起こされた奄美諸島』（中山清美著 奄美文化財団 平成21年）
- 『目で見ると奄美の100年』（監修楠田豊春 郷土出版社 2004年）
- 『ヤコウガイの考古学』（高梨修著 同成社 2005年）
- 『大和村誌』（大和村 2010年）

他に、弓削政己氏の研究発表論文や、南海日日新聞社連載「薩摩侵攻400年 未来への羅針盤」（南海日日新聞社・琉球新報社合同企画 2009～2010年）、Ⅱ部・Ⅲ部は奄美小学校の「学校沿革史」「学校要覧」「卒業アルバム」「記念誌」（50周年・60周年・70周年）等を参考としている。

特にⅠ部については弓削政己氏（奄美郷土研究会）、高橋一郎氏（奄美民俗研究家）、中山清美氏・高梨修氏（ともに奄美市教育委員会）、Ⅱ部については岩多雅朗氏（鹿児島土地区画整理協会）に多くの御教示をいただきました。写真撮影に関して、吉良正人氏にも御協力いただきました。奄美市役所の企画調整課・建築住宅課・市民課、奄美市教育委員会生涯学習課文化財室、知名町役場総務課、伊仙町教育委員会、宇検村教育委員会、喜界町教育委員会にもいろいろと御配慮いただきました。心から感謝申し上げます。また、Ⅲ部へのアドバイスをもらったり資料編集等で協力してもらったりした本校職員の対応もうれしく思っています。